

退任者特別投稿

私のハンパな履歴書

鄭 雅 英*

以下は、2022 年度秋学期「東アジアと朝鮮半島」初回授業の冒頭部で話した自己紹介を文章化したものです。

生い立ちと学生時代

授業担当の鄭雅英（ちょんあよん）と言います。経営学部教授です。こういう経験は最初で最後かと思いますが、来年 2023 年 3 月で大学の定年を迎えることもあり、授業を始める前に自己紹介もかねて自分の生い立ちと研究について話しておこうと思います。

私は日本で生まれた韓国籍を持つ 2 世の在日韓国人です（在日朝鮮人と言っても良いですね、同じことです）。神奈川県横浜で生まれました。父親は韓国のソウル生まれで、太平洋戦争の始まった翌年、医学を勉強するために日本に渡ってきました。当時、植民地朝鮮でも徴兵制が行われるのではないかと噂が広まっていて、小さな商売をしていた祖父母は長男である父親を戦争の前線に送らせないために、相当な努力をして父を日本に送ったのだと思います。事実、1943 年には朝鮮人も徴兵の対象となり、戦線に送られた植民地の若者たちは悲惨な状況に追い込まれましたが、東京の私大医学部生になったわが父親は辛うじて、それを逃れました。ただ父親は戦後、ちょっと不思議な人生を歩んで結局医者にはなりませんでした。その後父はいろいろな仕事をしていましたが、経済的には厳しかったですね。

母親は日本生まれの日本人。ただし太平洋戦後しばらくたってから父親と結婚し、その後韓国籍を取りました。現在と違って、日本人と韓国人との国際結婚というのはなかなか大変な時代で、母親も苦労は大きかったはずです。ともかく、私は韓国人と日本人との間に生まれ、今は「ダブル」つまり二つの文化を持っているという意味の言葉で自分を紹介できますが、以前は「あいのこ」なんて散々な言われ方でした。

小学校は地元横浜の公立小学校に通いました。当時（今もですが）、在日コリアンが学校に通うときは通称名（日本名）を使うのが普通で、私も母親の中村姓を名乗りました。もっとも地元で中村さんの夫は韓国人であることは公然なので、周囲の子どもにも私が韓国人だということは丸わかりでした。学校で成績も運動もパツとしない朝鮮人の子なんて、当時も、格好のい

* 立命館大学経営学部 教授

じめの対象です。低学年の時は学校に行きたくないときもありましたが、そのうち居直るようになりました(笑)。1960年代の日本の公立学校では、まだ戦後の平和教育、民主教育の余韻が残っていて、授業や学級会を通じて他者と議論するときのルールや議論の大切さをしっかり教えていましたし、戦争経験世代の先生からは太平洋戦争中の悲惨な経験談もたくさん聞かされました。基礎的な民主主義の概念や反戦意識は小学校教育で培われたような自己イメージがあって、そのことでは日本の学校教育に感謝しています。ただ、今の日本の教育は全く様変わりしてしまいましたが。中学高校時代は、友人たちにおれは朝鮮人だと先に名乗り、何か文句があるか、という空気を作っておきました。日本で社会的マイノリティの人権問題が人々の意識に上りだすのは1970年代からのことで、多少はそういう影響があったのかもしれませんが。それでもいろいろありましたが、面倒くさいので高校生の途中で名字は本名の鄭(テイ)に変えました。

大学は浪人して早稲田大学の政経学部に入りました。同じ学部の1, 2学年上に元経営学部長の佐藤典司先生がいらした、と知ったのはずいぶん最近のことです。政治学にあこがれて入学したのですが、いざ授業を受けてみると期待に反してさっぱり興味が湧きませんでした。かく言う私も、大学教員として同じような失望を学生に与えたのだらうかと反省しきりですが。代わりにのめり込んだのは、在日韓国人学生サークル(韓国文化研究会)の活動でした。ほぼ初めてできた在日の友人や先輩後輩といっしょに韓国語や朝鮮半島の歴史、日韓の政治情勢を学び、夜遅くまで飲み屋で酔っぱらいながら在日韓国人としての生き方を議論し、そのまま先輩友人の下宿を泊まり歩く生活でした。韓国は軍事独裁政権の時代で、民主主義を求める大学生や労働者、知識人が弾圧されながら抗議の声を上げ続ける姿が、日本にも伝えられていました。日本全国の韓文研の連合組織(在日韓国学生同盟)があって、韓国軍事政権の退陣と韓国民主化運動弾圧に反対する方針を掲げ、東京や大阪でデモや集会、韓国大使館・領事館への抗議活動を繰り返し組織していて、私もいっばしの活動家気取りで全て参加しました。授業に出る時間なんてありませんね。もったいないことに、せっかく入った大島英樹先生の国際関係論のゼミもサボりがちでした。1980年大学3年の時に、韓国光州で民主化を求める学生市民の平和的デモ「鎮圧」に軍隊が動員されて多くの若者が虐殺される「光州事件」が起こり、あまりの衝撃に言葉も出ませんでした。東京での抗議デモに連日参加していたのですが、ショックのせいか、あまり記憶がありません。

こんな生活で成績も悪いので、大学は1年留年を余儀なくされましたが、学生時代のさまざまな経験と広がった人間関係は、その後に思わぬ恵沢を与えてくれました。

非常勤講師暮らしと「指紋押捺拒否」運動

大学卒業目前になって進路を考えましたが、予想通り、大学就職課に行っても企業の募集は全くありませんでした。当時、日本企業の募集には国籍条項があって、どこの大学を出ようと在日韓国人なんて最初から採用のらち外でした。その10年近く前に、ある在日青年が日立を相手取って起こした就職差別訴訟で、すでに原告は勝訴していたにもかかわらずですから、考えてみればひどい状況でした。「就職可能性ゼロ」は先輩たちからも聞かされていたので、それほどショックではありませんでしたが。公立学校の教員は可能かもしれないと思い、教職は取っていたので東京都の教員採用試験を何度か受けましたが、文部省の教員国籍条項に変化はなく、在日の知人たち同様、結果は連敗でした。東京の聖学院というキリスト教系中高校が社会科非常勤講師として雇ってくれ、何とか生活できたのは有難かったです。日本企業の多くが採用時の国籍差別をなくしたのは、1980年代終わりに日本の経済界で「グローバル化」が叫ばれ、欧米人をはじめ多様な海外人材の受け入れが急務になってからのことです。残念ながら、差別や人権問題の解決が主目的ではありませんでした。

学生時代は、韓国の民主化運動を日本で応援していて、卒業後もその思いは変わりませんでした。足元の在日自身の生活や権利に関わる問題にもっと目を向けなくてはという考えも強くなりました。たまたま1980年代前半、在日外国人（といってもその8割くらいは韓国・朝鮮人）に外国人登録法（当時）で義務付けられた指紋押捺制度は人権侵害だという声が上がっていました。私自身、14歳から2年ごとに地元の役所で人差し指にべったりとインクを塗られて指紋を取られるのは不快な体験でした。在日社会には朝鮮半島の二つの政権を代弁するような二つの民族団体（民団と総連）がありますが、どちらの団体からもはみ出したような在日の若者と華僑、欧米出身の宗教者やジャーナリスト、いろいろな市民運動に関わっていた日本人たちが集まって、指紋押捺しないと事前に予告する「指紋押捺拒否予定者会議」なる不思議な名前のグループを立ち上げました。私も最初のころから参加しましたが、日本中で指紋押捺を拒否したり「今は押さない」と留保を宣言したりする在日外国人は、1985年のピーク時に1万人を超えます。日本全国にこの問題に取り組むさまざまな市民団体が作られ、そのネットワークを作りながら法務省や自治体と厳しい交渉を続ける活動への参加は、底辺から民主主義を考える貴重な体験でもありました。外国人登録法に規定された指紋押捺制度は、実にさまざまな経緯を経ましたが、2000年に最終的に廃止されました。

指紋押捺拒否運動が続いていた1986年か87年の暮れに、ロスアンジェルスに日本領事館に日本の指紋押捺制度に抗議するデモがあったという知らせがありました。どんな団体がデモを行ったのか、調べてみると、第2次世界大戦時にアメリカ政府によって12万人の日系アメリ

カ人が「敵国人」として強制収容所に送られた不当な歴史があるのですが、それに対してアメリカ政府の謝罪と賠償を求める日系人を中心とした市民運動があり、そこに参加していた人々でした。露骨な人種差別によって人権侵害が起こされた歴史の「過ちを正す (REDRESS)」という運動で、アメリカの反差別運動の一角を占めていることを初めて知りました。日系人をはじめ、アメリカ合衆国内でマイノリティの人権運動を行っているグループが、日本社会の人権問題にも関心を注いでいる事実には驚ろかされもしました。1988年の夏、ともかくその日系人グループと会ってみようということで、反指紋運動の仲間数名と一緒に渡米しました。

ロスで出会った日系の若者から聞く、深刻な差別を乗り越えてきた日系人の取り組みには心を打たれました。また彼らの人権ネットワークを通じて、在米コリアンの青年団体、黒人解放運動の活動家、ネイティブ・アメリカン (いわゆる「インディアン」) の団体、プエルトリコ (アメリカ合衆国の事実上の植民地) 独立運動の団体など、半月少々の短い期間に全米のさまざまな人権団体を訪ねて話を聞くことができました。ニューヨークのハーレムを拠点に、アメリカのさまざまな人権問題に取り組む著名な日系人活動家であるコーチャマさん夫妻の自宅に招かれ、何人もの若い人権活動家と交流したのも忘れ難い思い出です。ちなみに日系人強制収容に対する謝罪と賠償を規定する法律は、私が渡米したころにアメリカ議会を通過し、すでに日本に帰国していた人も含め当時生存している 6 万人ほどの被収容者全員に、レーガン大統領署名入りの謝罪文と 1 人 2 万ドルの賠償金が支払われたのでした。

人権は国境も民族も超えるものなのだというのを、身にしみて感じた経験でした。

大学院入学と延辺留学

半月少々の短いアメリカ旅行でしたが、印象に残った一つは在米韓国人の暮らしとロスにあったコリアタウンの景色でした。1980年代、アメリカに移民した韓国人はすでに 100 万人を超えて日系人を上回っていましたが、ロスのコリアタウンを訪ねてみると、街中ハングルだらけで商店にはありとあらゆる韓国商品が並び、商店もレストランもすべて韓国語で用が足ります。東京や大阪の在日コリアン集住地とはかなり景色が異なり、在米コリアンの移民史にも関心を深めました。それをきっかけに、ほかの在外コリアンの生活が見てみたくなり、1989年にはソ連極東とサハリンに住む朝鮮民族を、1991年には中国吉林省の延辺朝鮮族自治州を訪ねる旅に出ました。特に面白かったのは中国・延辺で、朝鮮が日本の統治下におかれた時代に多くの独立運動家が活躍した場所ということもありましたが、そこに住む朝鮮民族は中国国籍でありながら日常生活では朝鮮語と中国語を併用し、自らを朝鮮民族であると明確に意識して暮らしていることでした。民族意識 (エスニシティ) と国籍の分離した朝鮮族の存在は、閉鎖的な日本社会で暮らす私にはなかなか刺激的でした。1 か月ほどの滞在があまりにも面白く、

当地にある朝鮮民族の大学として名高い延辺大学に留学しようと、だしぬけに思い立ちました。ただある在日の先輩から、どうせ留学するならどこかの大学院に籍を置いてから行くように強く勧められ、たまたま受けた法政大学の社会学専攻修士課程に社会人入試で入りました。アジアアフリカ社会を研究されている土生長穂先生のゼミに入れたのは幸運でしたが、私はすでに30歳を超えていて、研究者で身を立てようなどと無謀なことは全く考えられませんでした。

延辺大学では中国語を入門から習いながら、お願いして興味のある専門授業を個別で受けさせてもらう贅沢な環境でした。中国民族理論、中国朝鮮族近現代史、朝鮮族教育史、延辺農業史、朝鮮文学など、どれも朝鮮族の先生が朝鮮語で熱心に講義してくださる充実した時間でした。大学のある延吉という街は朝鮮族が多数を占めていて、街中では朝鮮語が話されていました。中国にありながら他の中国の都市とは空気感が異なり、とって韓国街とは明らかに異なる、中国朝鮮族の文化や意識を色濃く反映した空間に興味は尽きませんでした。中国東北地方の料理と朝鮮料理を混ぜ合わせたような食文化も楽しく、朝鮮族学生の親しい友人もでき、通算で1年半ほどの留学生活はあっという間に過ぎ去りました。

延辺大学で受けた朝鮮族教育史は、単なる教育史というよりその社会背景も理解しやすい内容でした。教授して下さった許青善先生は延辺大学の著名な老教育学者でしたが、朴訥な風貌のうちに高い人格を収めた方で、すっかりファンになりました。延辺教育史の窓を通じて中国朝鮮族の歴史とエスニシティを読み取れるのではないかと考え、日本に戻ってそれをテーマにした修論を書きました。

大阪市大・佐々木ゼミと再びの非常勤講師暮らし

その頃、結婚を機に大阪に住まいを移しましたが、相変わらず定職につける見込みもなく、在日韓国人で小学校の専任教員をしているパートナーの勧めもあり、博士課程に進学することにしました。どうも私は、人から勧められないと自分の進路も決められないところがあるようです。学生時代からの親しい先輩で韓国政治・経済の専門家である大阪市立大学（現・大阪公立大学）教員の朴一先生に相談すると、大阪市立大学院で中国経済学を専門にされている佐々木信彰先生を紹介してくださり、今度は通常試験で進学を決めました。佐々木先生は中国の民族問題にも詳しく、著書も出されていました。大学院佐々木ゼミの院生は実に多士済々で、中国経済のなかの専門分野も学生の年齢・経歴もさまざま、優秀な中国人留学生も数名加わり、持ち回りの報告をめぐって盛大な議論が交わされます。経済学の基礎も怪しかった私には、大きな刺激となりました。佐々木ゼミ出身の仲間のうち、実に十余名は大学専任教員や研究機関に職を得ていて、その中には2022年から立命館の経済学部長を務められている高屋和子先生もいらっしやいます。もちろん、年齢は私よりずっとお若いですけど。

博士論文はなかなかテーマを絞れなかったのですが、やはり学生時代の先輩で信州大学経済学部教授だった金早雪先生が、何かの参考にと送ってくださった段ボール箱一杯の旧「満州国」関連の資料を見ながら、今度は経済史を軸に朝鮮族史を書こうと思い立ちました。しばらく博論に取り組めなかったのですが、佐々木先生のお陰もあってアジア政経学会が若手研究者のために出していた「現代中国研究叢書」の執筆権を頂戴し、それを学位論文とすることにして、何とか 2000 年春に『中国朝鮮族の民族関係』を出すことができました。何しろ関連論文と延辺で買い集めた資料を読んで勉強しながら執筆するので、執筆はかなり難渋しました。19 世紀中盤以降、朝鮮半島から延辺に移民した朝鮮民族の現代に至るまでの経済開拓史、土地関係問題、農業史、商工業や対外貿易などを扱った内容ですが、実際は中国に移民した朝鮮民族のエスニシティを主題にしています。日本支配期の抗日運動だとか 1960 年代文化大革命などの章もあり、ゴツ煮同然の内容ですが、当時日本ではまだ中国朝鮮族に関する研究は多くなかったことと、朝鮮語と中国語両方の資料を使えたのが多少の利点でした。会話は未ださっぱりですが、延辺で中国語を習って論文くらいは解読できるようになっていたのが助けになりました。学術的評価はともあれ、2000 年代以降に次々と日本に留学に来た中国朝鮮族の大学院生が、私の文章をかなり参考にくれたようです。この程度の内容で博論になるんだ、と思われたのかもしれませんが、うれしかったですね。

めでたく博士号は頂戴しましたが大学専任教員への道は遙か遠く、ただ幸い、関西には大阪市大の朴一先生や、これまた学生時代の友人で甲南大学経済学部教授（韓国経済）になっていた高龍秀先生、東京時代に知り合った先輩で立命館大学国際関係学部に着任されていた文京洙先生（元・国関学部長）など、すでに大学専任教員になられた知人たちが、あちこちの大学の非常勤講師の口を紹介してくださり、数えてみると関西圏 10 大学で非常勤を務めました。一番多いときは大学で週に 16 コマ、その他にも依頼されて高校や夜間中学でも授業を請負い、忙しかったけれど何よりも有難いことでした。

立命館での 17 年間について、ちょっぴりのこと

前置きが異常に長いですね。立命館には 1999 年から朝鮮語の非常勤講師を担当し、2006 年に BKC にあった経営学部「朝鮮語」「専門朝鮮語」任期付き助教授で採用されました。経済学の博士号を持っていたことがアドバンテージだったようですが、「実力より運」を地で行くケースです。謙遜でも何でもなく。私よりずっと力がありながらポストにつけない研究者を、ごまんと見てきましたから。2010 年に再度人事が起こされ、任期のない「朝鮮語」専任教員として採用されました。50 歳を過ぎてから、生涯初めての正規職でした。

言語の授業は他の専任や講師の先生たちとのチームワークですから、私の力不足をずいぶん

と補ってもらい、頭が下がりっぱなしです。幸い「韓流ブーム」が途切れることはなく、朝鮮語の受講学生は増え続け、学生の実力も授業での反応も年々向上して働き甲斐がありました。実力向上に役立ったかはともかく、毎年1回朝鮮語副専攻キャンプを企画して全学受講生や韓国人留学生と一緒に韓国文化や言語に浸って一日を過ごしたり、CALL用の教材を手作業で作ったりなど、いろいろなことに挑戦できたのも良かったです。副専攻合宿が楽しみという学生の言葉には、励まされました。経営学部専門ゼミも2期だけですが担当したことがあります。私のゼミはゆるゆるの内容ですが、ゼミ後に酒を交わしながら日韓問題について結構真剣な議論をしたり、ゼミ生とソウルや上海を旅したりしたのは楽しかったです。

今も続けている教養科目の「東アジアと朝鮮半島」は、どうすれば日韓の問題を日本の若者に理解してもらえるのか、いろいろ試行錯誤の場でもあり勉強になっています。同じく教養科目の「平和人権フィールドスタディー（旧・国際平和交流セミナー）」では10年続けて韓国の、それも元「戦争慰安婦」の女性たちの共同生活施設（ナムムの家）や日本の植民地支配の痕跡を展示する博物館などを、コロナ禍のここ2年は関西関東のコリアタウンや在日集住地、ヘイトスピーチや関東大震災時朝鮮人虐殺現場など、韓国でも日本国内でも日韓歴史問題の一番濃い部分を訪問し、当事者に会って話を聞くプログラムを作りました。参加した学生さんは、心身ともにへとへとになりながら、それでも真摯に向き合おうとする姿勢を最後まで崩さないところが、さすが立命館学生だと思いました。直近2022年のフィールドスタディー参加学生は、訪問先で毎日意見を交わしていくうちに、目に見えて彼らの議論と思考が深まっていくのが分かり、正直、学生への驚きと敬意を覚えました。「いまどき」の学生さん、甘く見てはいけませんね。

だいぶ長話になりましたね。最後に「研究者」らしく、今までと今後の研究のことについて少しだけ話します。すでにお話したように、私は中国で生活してきた朝鮮民族に深い関心を寄せてきました。それは、在日朝鮮人として同じ朝鮮半島以外の地で生活するマイノリティ同士の歴史や今の生活を比べるという興味もありますが、中国近現代の厳しい歴史の中で生きてきた中国朝鮮族の歴史を、朝鮮半島にとどまらない、より大きな視点で考えるとさらに関心深く思われるためです。特に中国朝鮮族の歩んだ20世紀の歴史を、東アジアの枠組みでもう一度考えられたらと思っています。

もう一つは済州島です。日本の植民地時代、済州島から多くの人が日本に働きに出て、そのまま移住した人も少なくありません。植民地時代に済州島と大阪を結ぶ定期航路があったので、大阪には特に済州島出身者が多く暮らします。私のパートナーも、そうした家族の末裔です。近頃人気の大阪コリアタウンは、よく見ると済州島の気配を見て取ることができる面白い場所です。一方で、済州島では1948年に朝鮮半島の南北分断に反対する左翼グループの蜂起があり、その「鎮圧」を名目に韓国軍や警察によって数万人の島民が虐殺される悲劇的な歴史（「済

州4・3抗争)の場所でもあり、実は大阪も全く無関係ではありませんでした。「済州4・3」や植民地時代から日本を往来した人たちの歴史に深い関心があり、すでに専門的な研究者が何人もおられますが、私もその隅っこでもう少し詳しく知りたいと思っています。三つめは、私自身が学生時代に参加していた在日学生組織の韓国学生同盟など、日本の戦後に活動した在日同胞青年学生運動の歴史です。世界的な学生運動や市民運動のうねりが起きた1960年代、70年代の日本の社会史を考えるうえでも、まだ十分な研究の対象になっていない部分です。

こうしてみると、私の関心領域は朝鮮半島の外郭で生きたコリアンの歴史と今、ということにまとめられそうです。朝鮮半島ど真ん中の華々しい歴史ではなく、その外側の歴史それもマイナーで今まであまり人から見向きされなかった、埋もれかけの事実を掘り起こすことに少しでも貢献できたらと思うのです。私は昔から「お前はいつも斜(はす)に構えている」と批判めいて言われることが多いのですが、ねじれた私の性格がこうした関心対象に影響している可能性は確かに大きそうです。

その他にも経営学部の同僚の先生や職員の方々との楽しく意味深い交友、立命館コア研究センターのこと、所属したいくつかの学会での活動のことなど、肝心なことを何もしゃべっていません。しかし、すでにみなさんお気づきのように、私は「研究者」としては中途半端でかなり怪しい部類ですし、これ以上長たらしい老人の戯言など聞いて面白いわけありませんから、とりあえずここまでにしましょう。有難いことに2023年度以降も「特任教授」の肩書で、まだしばらく大学には出入りできるようです。

振り返れば、若き日に、後先の生活のことなど何も考えずに飛び込んだ学生組織や市民団体での活動、だしぬけに思い立った中国留学などを通じた体験と人間関係が、後々の研究を含めた生活に豊かな恩恵を与えてくれました。私は在日朝鮮人2世として、少なからず肩ひじを張った生き方をしてきましたが、同じ境遇にいる在日同胞だけではなく、自由で開かれた思考を持つ多くの良心的な日本市民に囲まれて生きてこられたことには、感謝の念しかありません。漠然とですが「守られて生きてきた」という感覚があります。

人生は何度でもやり直しができること、そしてそれほど捨てたものでもないこと。それだけは、学生の皆さんに伝えておきたいと思います。

ご清聴感謝。感想文はマナバにどうぞ。